

ICTを活用した教員養成教育に関する研究

——教職eポートフォリオに関する第一次調査の結果より——

青木 幸子*・二川 正浩**・渡部 晃正***
走井 洋一****・相良 麻里*****・中島 絹子*****

An Investigation of Teacher Education System Using ICT :
Results of the Initial Survey Concerning the E-Portfolio System

Sachiko AOKI, Masahiro FUTAGAWA, Terumasa WATANABE,
Yoichi HASHIRI, Mari SAGARA, Kinuko NAKAJIMA

1. 研究の目的

東京家政大学（以下、本学と称する）教員養成教育推進室では、日本の未来を担う子どもたちを育てる教員を目指そうとする学生が、自らが理想とする教員像を描き出し、しっかりとした信念を持って子どもたちと向き合い、教育活動に取り組んでいくことのできる基礎的・基本的な力を修得できるよう、より一層のサポート体制を強化するため、文部科学省が定める「教職履修カルテ等」を教職eポートフォリオとして導入することにした。ポートフォリオは、自らの目標を定め、関連する科目を履修し、さまざまな体験を経ながら、それらについて自己分析・自己評価を行い、さらに教員からのコメントやアドバイスを受けて、自らの学修や体験の記録を系統的に蓄積していくものである。教職課程を履修する学生は、このポートフォリオを参照し、“振り返り”と“気づき”を繰り返すことにより、大学在学中に自己を成長させながら教職へ向けての準備を整えていくことになる。これは、教員養成におけるキャリア教育の一環としても位置づけることができる（黒澤2012）。また、ポートフォリオを就職活動の際の自己アピールの手段として使うことも可能である。つまり、本学のポートフォリオは、教職へ向けて自覚的に取り組むマインドの醸成と自らをアピールする手段を作り上げるという二つの側面をもっている。

学生たちにオンラインでポートフォリオを作成してもらうのは、内容の編集・再編集・分析が容易なこと、多量なデータを保存可能で、劣化せず、複製も容易なこと、ネットワークを通してどこからでもアクセスが可能で、大学のパソコンからだけでなく、インターネットに接続できる自宅のパソコンや携行しているスマートフォンからもアクセスすることができるなどの長所を考慮した結果である。また、オンラインでポートフォリオにアクセスできることは、教員にとってもメリット

*栄養科 家庭科教育研究室 **環境教育学科 生徒指導論研究室 ***児童学科 教育社会学研究室

****児童教育学科 教育学研究室 *****教員養成教育推進室

があり、教員は、ネットワーク環境が整っている場所であれば、いつでも、どこからでもコメントとアドバイスを入力することができる。さらに、ポートフォリオを冊子ベースで行った場合に比べ、紛失リスクが軽減されること、保管場所を問わないこと、紙のような劣化がないことなども大きなメリットとしてあげることができる。その反面、オンラインの場合、セキュリティには万全を期すること、データのバックアップを作成することが必要となる。このように、時間的・空間的な制約が少なく、利便性に富んだオンラインによるポートフォリオ作成は、高度化しつつある教員養成教育に新たな地平を拓くものと考えられる。

一方、近年、電子黒板や電子教科書に代表されるように、教育現場において、情報コミュニケーション技術（Information and Communication Technology, 以下、ICTと称する）を活用した教育実践が求められるようになり、教職を目指す学生が、大学在学中にICTに慣れ親しむことは、教員養成の上から意義のあるものと認識されつつある。しかしながら、本学におけるICTの教育活用は、情報教育、初年次の導入教育ならびに一部の教員によって熱心に行われているものの、全体から見れば脆弱といわざるをえない。したがって、ICTの教育活用に関する知識・経験の蓄積は、全体的に見て乏しく、その効果・活用可能性を十分に把握するまでには至っていない。

本研究は、ICTを活用した教員養成教育の推進を図るため、まず、その第一歩として、2010（平成22）年度に導入された教職eポートフォリオ・システムについて、その教育効果を明らかにすることを目的に開始された。本稿では、とくに同システムが導入されて3年目にあたる2012（平成24）年6月に実施された「ICTを活用した教員養成教育に関する調査〈第一次調査：教職eポートフォリオ〉」の結果を概観しながら、導入初期段階における教育効果を考察し、問題点を把握するとともに、このシステムの改善を含めた今後の方向性やポートフォリオ活用の展望について明らかにしていくことにする。

2. 教職eポートフォリオの導入と運用

教職科目として新設された「教職実践演習」では、学生の履修カルテ等の作成が求められている（課程認定委員会 2008）。履修カルテ等の作成は、入学の段階からそれぞれの学生の学習内容、理解度等を把握することをねらいとしており、その導入の背景には「教職実践演習」との関係、さらには、教職指導との密接な関係があるとされる（鞍馬 2010）。本学教員養成教育推進室では、2010（平成22）年度以降に入学した教職課程履修学生に対して「教職eポートフォリオ」の作成を義務づけ、これに対応している。履修カルテ等をポートフォリオとして導入した理由は、義務化の趣旨を踏まえ、教職課程を履修する本学学生が主体的に「学びと振り返り」をおこなうことで、教員としての資質能力を高めてほしいという意図を込めたからである。

教職eポートフォリオは、本学ホームページよりアクセスし、オンライン上で学生ごとに作成する方式をとっている。ポートフォリオは、4つのパート（①教員免許状取得のための到達度自己判定票、②履修状況、③自己評価（履修分類別）、④必要な資質能力の指標）に分かれ、それぞれのパートに入力すべき複数の項目が用意されている。「①教員免許状取得のための到達度自己判定票」

では、取得予定の免許状種別、教職課程履修の理由、年次ごとの自己課題を入力（自由記述）し、自己課題については、その達成状況を5段階で自己評価することになっている。「②履修状況」では、学期ごとに履修した科目について、付与された成績評価を選択（秀～不可の5段階）し、それに対する自己評価を「③自己評価（履修分類別）」にておいて入力（自由記述）する。「④必要な資質能力の指標」では、教員に求められる資質能力として、その基本となる29の能力要素が示されており、それぞれ達成状況を5段階（「まったく達成できていない」～「十分に達成できている」）で自己評価することになっている。取得予定の免許状によっては、30以上の能力要素の達成状況に関する回答が求められる。さらに、大学内・外の活動（クラブ・サークル活動やボランティア活動）、大学外の試験（TOEIC, TOEFLなど）や免許・資格の取得状況を入力（自由記述）できる欄も用意されている。なお、この最後のパートにおいて「教員によるコメントとアドバイス」欄が設定されている。教員は、教職課程履修学生のポートフォリオをオンライン上で閲覧することができ、年度ごとに、学生のポートフォリオに示された内容についてコメントまたはアドバイスを入力（自由記述）することになっている。これにより、学生は、自らの活動について、オンラインのポートフォリオを通して教員から何らかのフィードバックを定期的に受けることになる。そして、そのフィードバックの内容を踏まえ、学生は、次の目標・課題を設定し、自らの資質能力の向上を図っていくことになる。

3. 調査の概要

3.1 調査方法

「ICTを活用した教員養成教育に関する調査〈第一次調査：教職eポートフォリオ〉」は、教職課程を履修する本学3年生を対象として、2012（平成24）年6月に調査票（質問紙）を用いた集合調査として実施された。調査票は、教職課程3年次必修科目（計5科目）の授業時間内に配付・回収された。調査票配付数は415、回収数は415、有効票は412（有効回答回収率99.3%）であった。調査の実施に際しては、調査の目的を説明し、調査は無記名でおこなわれ、結果は統計的に処理されること、各人の回答が成績評価等に影響を与えないことを伝えた。同調査は、教職eポートフォリオ・システム導入3年目に実施されたもので、対象となった学生たちは、本学においてeポートフォリオを作成する最初の学生である。また、これらの学生がポートフォリオを完成させて卒業するのは、2014（平成26）年3月であるため、今回の調査は、eポートフォリオの教育効果を把握するという点において、中間調査という位置づけになる。

3.2 調査内容

調査票は、Ⅰ）フェイスシート [問1～6]、Ⅱ）教職eポートフォリオの入力・作成状況および入力環境 [問7～9]、Ⅲ）教職eポートフォリオに対する理解 [問10]、Ⅳ）教職eポートフォリオに取り組む姿勢 [問11]、Ⅴ）教職eポートフォリオの有効性と達成状況 [問12～14]、Ⅵ）教職eポートフォリオに関する全般的な意見 [問15] の6項目計15問から構成されている。Ⅰ）～Ⅳ）

およびV) の問12と問13については、選択肢による回答を、また、V) の問14およびVI) では、自由記述による回答を求めている。

4. 調査の結果と考察

4.1 フェイスシート (属性)

調査に回答した学生の所属学科・専攻等を多い順に見ると、児童教育学科92名 (22.3%)、栄養学科 [管理栄養士専攻] 59名 (14.3%)、心理カウンセリング学科55名 (13.3%)、造形表現学科52名 (12.6%)、服飾美術学科41名 (10.0%)、英語コミュニケーション学科41名 (10.0%)、栄養学科 [栄養学専攻] 38名 (9.2%)、環境教育学科29名 (7.0%)、教育福祉学科5名 (1.2%) であり、児童学科を除く全学科の学生から回答を得た。なお、本学児童学科は、児童教育学科と同様に幼稚園教諭の養成をおこなっているが、同時に保育士も養成しているため、教職eポートフォリオ・システムを利用せずに、独自に履修カルテを作成している。

取得予定の免許状 (複数選択) を校種別に見ると、中学校214名 (51.9%)、高校204名 (49.5%)、小学校 92名 (22.3%)、幼稚園 58名 (14.1%) であり、他は、「校種なし」の栄養教諭 87名 (21.1%)、養護教諭 55名 (13.3%) である。また、免許状を教科 (複数選択) 別に見ると、全科 [小学校] 92名 (22.3%)、家庭65名 (15.8%)、英語60名 (14.6%)、美術52名 (12.6%)、理科33名 (8.0%)、情報18名 (4.4%)、社会5名 (1.2%)、公民5名 (1.2%)、保健5名 (1.2%) の順となっている。

表4.1.1は、教員免許状を取得する理由を、また、図4.1.1は、調査実施時における教職への希望を示したものである。

	人数 (%)
将来の選択肢を増やすため	234 (56.8)
資格取得のため	233 (56.6)
教員という仕事に魅力を感じたから	208 (50.5)
教員はやり甲斐がいのある職業だと思ったから	131 (31.8)
家族にすすめられて	104 (25.2)
就職に有利だと考えたから	89 (21.6)
なんとなく	22 (5.3)
高校の先生にすすめられて	16 (3.9)
友人や同級生が取得するから	10 (2.4)
その他	29 (7.0)

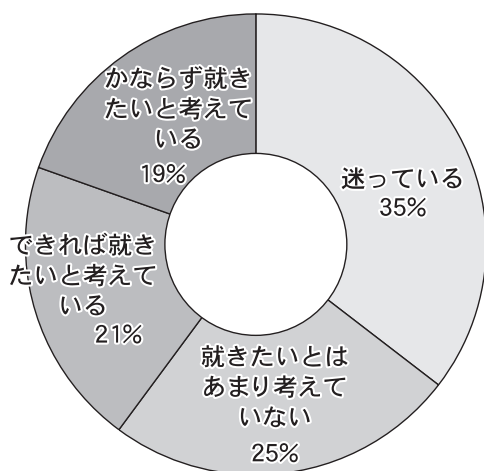


図4.1.1 教職への希望 (n=412)

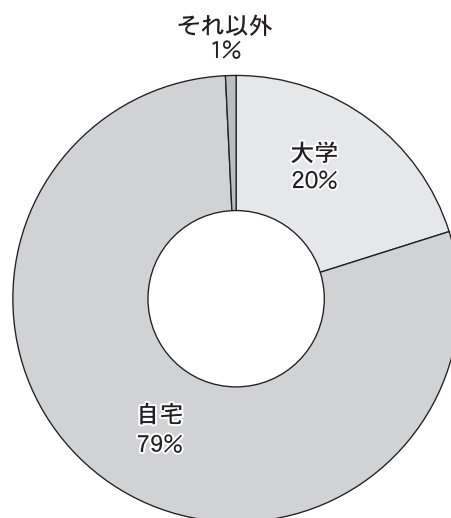


図4.2.1 教職eポートフォリオの入力場所 (n=412)

これらの図・表からもわかるように、本学教職課程履修者の履修動機は多様であり、必ずしもその全員が教職に就くことを目指しているわけではない。

では、このような多様な履修動機をもつ学生は、教職eポートフォリオに対してどのように取り組んでいるのであろうか。以下、ポートフォリオの入力・作成状況と入力環境、ポートフォリオに対する理解、ポートフォリオに取り組む姿勢、ポートフォリオの有効性と達成状況、全般的な意見について見ていくことにする。

4.2 教職eポートフォリオの入力・作成場所および入力環境

(1) 教職eポートフォリオの入力・作成場所

eポートフォリオの入力・作成場所は、図4.2.1に示すとおり、約80%が自宅、約20%が大学であり、それ以外の場所ではほとんどおこなわれてないことがわかる。

(2) 大学での入力場所

大学で入力している約2割の学生は、学内のどこで入力しているのであろうか。もっとも多く利用している場所を1つだけ選んでもらった。その結果を示したのが、表4.2.1である。もっとも利用が多いのは「2) コンピュータ自習室2 [16号館 1F]」であり、その他に「1) コンピュータ自習室1 [15号館 B1]」や「4) 図書館のコンピュータ」なども利用されていることがわかる。

(3) 入力機器

では、いったい学生はどのような機器を使って入力しているのであろうか。もっとも利用頻度の高い入力機器を1つだけ選んでもらった。その結果を示したのが、表4.2.2である。約60%の

表4.2.1 大学での入力場所 (n = 101)

	人数 (%)
1) コンピュータ自習室1 [15号館B1]	17 (16.8)
2) コンピュータ自習室2 [16号館1F]	72 (71.3)
3) コンピュータ室A・B・C [10号館]	3 (3.0)
4) 図書館のコンピュータ	7 (6.9)
5) 120周年記念館の各階ラウンジにあるコンピュータ	2 (2.0)
6) 上記以外	0 (0.0)
計	101 (100)

表4.2.2 何を使って教職eポートフォリオを入力したか (n = 412)

	人数 (%)
1) デスクトップ型パソコン	158 (38.3)
2) ノート型パソコン	245 (59.5)
3) スマートフォン	7 (1.7)
4) 携帯電話	1 (0.2)
5) タブレット型端末	1 (0.2)
6) その他	0 (0.0)
計	412 (100)

学生がノート型パソコン，約40%がデスクトップ型パソコンを利用して入力しており，それ以外は少ないことがわかる。

(4) 入力・作成の際の印象

eポートフォリオを入力・作成する際，学生はどのような印象をもっていたのであろうか。調査では，入力・作成作業に関連する7つの質問項目を設定し，4段階（「1：そう思う」～「4：そう思わない」）で回答を求めた。その結果を示したのが表4.2.3である。

表4.2.3 教職eポートフォリオを入力・作成する際の印象 (n = 412)

	人数 (%)			
	1：そう思う	2：どちらかという とそう思う	3：どちらかという とそう思わない	4：そう思わない
①入力をスムーズに行うことができた	70 (17.0)	144 (35.0)	120 (29.1)	78 (18.9)
②入力は煩雑であった	61 (14.8)	137 (33.3)	159 (38.6)	55 (13.3)
③教員に相談し，指導を受けて入力した	5 (1.2)	22 (5.3)	54 (13.1)	331 (80.3)
④相談窓口相談し，指導を受けて入力した	5 (1.2)	7 (1.7)	37 (9.0)	363 (88.1)
⑤友人に相談して入力した	79 (19.2)	144 (35.0)	53 (12.9)	136 (33.0)
⑥入力に際して，ガイドブックは役に立った	137 (33.3)	159 (38.6)	79 (19.2)	37 (9.0)
⑦ICTの活用に抵抗感は無かった	90 (21.8)	175 (42.5)	105 (25.5)	42 (10.2)

各質問項目の分布状況を見ると、「①入力をスムーズに行うことができた」、「②入力は煩雑であった」という印象をもった学生の割合は、ほぼ半々であり拮抗している。入力をスムーズにおこなうことがむずかしかった学生は、「③教員に相談し、指導を受けて入力した」り、「④相談窓口で相談し、指導を受けて入力した」割合は低く、「⑤友人に相談」したり、「⑥ガイドブック」を活用して入力していることがわかる。また、「⑦ICTの活用に抵抗感はなかった（「そう思う」＋「どちらかというと思う）」64.3%に見られるように、本学学生のICT活用に対する抵抗感は、少なくなりつつあるように見受けられる。

eポートフォリオの入力・作成を経験した学生であるが、彼女たちは「教職eポートフォリオ」についてどの程度理解しているのだろうか。

4.3 教職eポートフォリオに対する理解

調査では、教職eポートフォリオに対する学生の理解を把握するため、4つの質問項目を設定し、4段階（「1：そう思う」～「4：そう思わない」）で回答を求めた。その結果を示したのが図4.3.1である。ここでは、質問項目ごとに見ていくことにする。

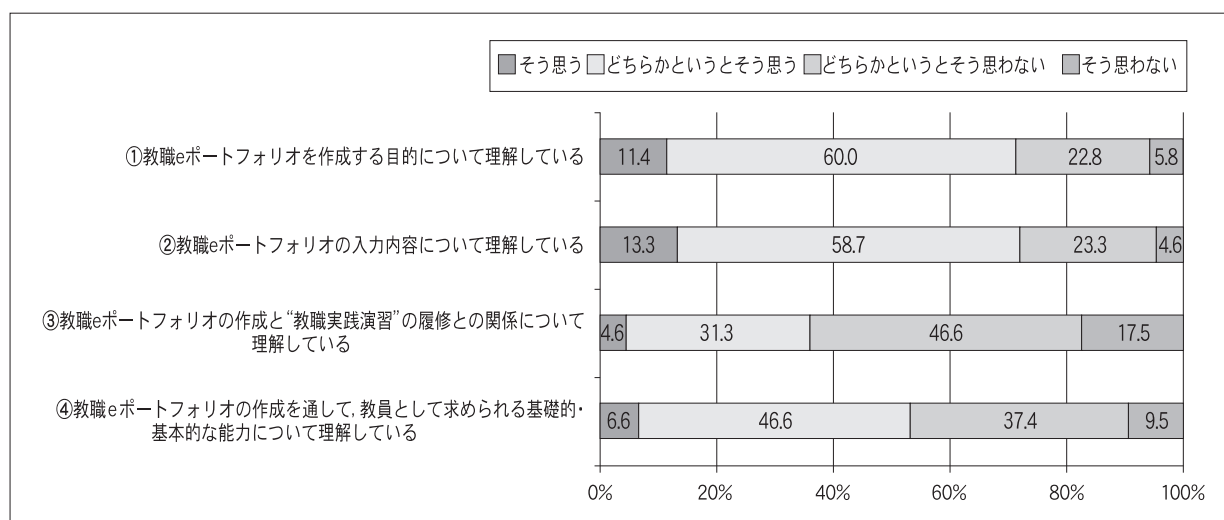


図4.3.1 教職eポートフォリオに対する理解 (n=412)

(1) 教職eポートフォリオを作成する目的について理解している

教職eポートフォリオを作成する目的の理解については、「1：そう思う」11.4%、「2：どちらかというと思う」60.0%、「3：どちらかというと思わない」22.8%、「4：そう思わない」5.8%となっており、理解している割合が70%を越えているものの、30%弱の学生が十分に理解していないことが明らかとなった。教職eポートフォリオのガイダンスを実施して、その目的を周知するとともに、ガイドブックにも記載しているにもかかわらず、理解が十分ではない学生が存在することは、ガイダンスやガイドブックでの記載にとどまらず、教職に関する科目等の授業時における教職eポートフォリオへの意識づけが必要であることが示唆される。

(2) 教職eポートフォリオの入力内容について理解している

教職eポートフォリオの入力内容の理解については、「1：そう思う」13.3%、「2：どちらかというと思う」58.7%、「3：どちらかというと思わない」23.3%、「4：そう思わない」4.6%となっており、(1)の目的の理解とほぼ同様の結果が出ている。ただ、教職eポートフォリオのなかでは明示的にはなっていない(1)の目的を理解しているかどうか、ガイダンスやガイドブックの内容を把握しているかどうか依存するのに対して、(2)は入力した際の内容への理解を問うているにもかかわらず、(1)と同様の結果であったことは、十分に内容を理解せずに入力をしている学生が一定程度存在することを示唆している。

(3) 教職eポートフォリオの作成と“教職実践演習”の履修との関係を理解している

教職eポートフォリオの作成と“教職実践演習”の履修との関係の理解については、「1：そう思う」4.6%、「2：どちらかというと思う」31.3%、「3：どちらかというと思わない」46.6%、「4：そう思わない」17.5%となっており、(1)の目的、(2)の入力内容の理解に比べて、理解が十分ではない学生が多いことがわかる。教職実践演習において要求される「学生のこれまでの教職課程の履修履歴を把握し、それを踏まえた指導を行うことにより、不足している知識や技能等を補うものとする」(課程認定委員会 2008)ことを担保するために教職eポートフォリオを作成することを、ガイダンスで言及するとともに、ガイドブックにも掲載していたものの、(1)とは大きな隔たりのある結果となった。これについては、学生がまだ教職実践演習を履修していないために、教職実践演習という科目の教職課程上での位置づけを十分に理解しておらず、それとの関係を考えることができていないことが推察される。しかし、4年次後期に開設される教職実践演習を履修してはじめて、1年次から実施している教職eポートフォリオの位置づけが理解されるのでは遅きに失してしまうので、1年次からガイダンス、教職に関する科目等での周知が必要であると考えられる。

(4) 教職eポートフォリオの作成を通して、教員として求められる基礎的・基本的な能力について理解している

教員として求められる基礎的・基本的な能力についての理解は、「1：そう思う」6.6%、「2：どちらかというと思う」46.6%、「3：どちらかというと思わない」37.4%、「4：そう思わない」9.5%となっている。本項目では、教職eポートフォリオ内で毎年度入力しなければならない「教員に求められる資質能力に関する自己評価」の項目内容に示される教員として求められる基礎的・基本的な能力についての理解を問うており、その結果は入力内容の理解度を問うた(2)の結果と一致することが予想されるにもかかわらず、実際にはこちらの方が理解度が低い結果となった。ここから示唆されるのは、第1に教職eポートフォリオの内容と教員として求められる基礎的・基本的な能力の内実を結びつけて考えることができていない学生が一定割合存在する

こと、第2に教職eポートフォリオの入力を行っているものの、その内容について十分に理解していない学生が一定割合存在することである。この点も、(3) 同様に、ガイダンス、教職に関する科目での周知が必要であることが明らかとなった。

教職eポートフォリオの内容に対して、必ずしも十分な理解が得られていない学生の実態が明らかになった。では、学生は、どのような姿勢で教職eポートフォリオに取り組んだのであろうか。

4.4 教職eポートフォリオに取り組む姿勢

調査では、教職eポートフォリオに取り組む学生の姿勢を把握するため、6つの質問項目を設定し、4段階（「1：そう思う」～「4：そう思わない」）で回答を求めた。その結果を示したのが図4.4.1である。ここでは、質問項目ごとに見ていくことにする。

まず、調査結果をもとに、「1：そう思う」と「2：どちらかというそう思う」の回答者を教職eポートフォリオに対して前向きに取り組む、または肯定的にとらえている学生、「3：どちらかというそう思わない」と「4：そう思わない」の回答者を教職eポートフォリオに対して前向きとはいえない、または肯定的にとらえていない学生として、大きく2つに分類し、各項目について学科・専攻ごとに見ていくことにする。

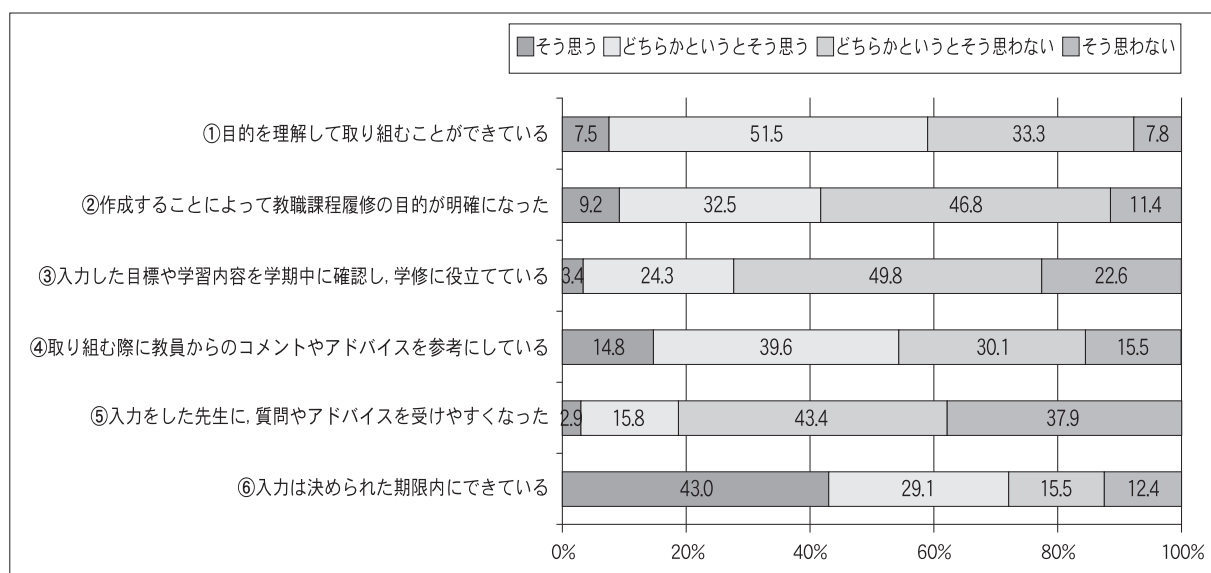


図4.4.1 教職eポートフォリオに取り組む姿勢 (n=412)

(1) 教職eポートフォリオの目的を理解し、取り組むことができている

全体では、59%の学生が教職eポートフォリオの目的を理解して前向きに取り組んでいることが把握された。59%を超えるのは栄養学科〔栄養学専攻〕(以下、栄養と称する)、造形表現学科(以下、造形と称する)、英語コミュにケーション学科(以下、英コと称する)、心理カウンセリング学科(以下、心カと称する)、教育福祉学科(以下、教福と称する)の5学科で、とくに心カは81.8%にのぼる。また、「1: そう思う」と回答したのは、全体の7.5%であり、10%を超えるのは心カと教福の2学科のみで、最も低い服飾美術学科(以下、服美と称する)は、4.9%となっている。一方、前向きとは言えない学生は、全体の41.1%に達する。41.1%を超えるのは児童教育学科(以下、児教と称する)、栄養学科〔管理栄養士専攻〕(以下、管士と称する)、環境教育学科(以下、環境と称する)、服美の4学科で、とくに児教は半数を超える。さらに、「4: そう思わない」については、環境、心カ、教福では0%であるが、全体では7.8%で、最も高い値を示した児教は、17.4%となっている。

(2) 教職eポートフォリオを作成することによって、教職課程履修の目的が明確になった

全体では、41.7%の学生が教職課程履修の目的が明確になったと肯定的にとらえている。41.7%を超えるのは、環境、造形、英コ、心カ、教福の5学科であるが、50%を超えるのは造形、心カ、教福の3学科のみである。また、「1: そう思う」は、全体の9.2%であり、10%を超えるのは造形、心カ、教福の3学科で、最も低い栄養は2.6%となっている。一方、肯定的にとらえているとはいえない学生は、全体の58.2%に達する。58.2%を超えるのは、児教、栄養、管士、服美の4学科で、いずれの学科も60%を超える。また「4: そう思わない」は、全体では11.4%で、最も高い児教では19.6%となっている。

(3) 教職eポートフォリオに入力した目標や学習内容を学期中に確認し、学修に役立てている

全体では、27.7%の学生が学修に役立てていると肯定的にとらえている。27.7%を超えるのは環境、造形、英コ、心カ、教福の5学科であるが、50%を超える学科はなく造形の38.5%が最高となっている。また、「1: そう思う」は、全体の3.4%であり、10%を超える学科はなく栄養と服美では0%となっている。一方、肯定的にとらえているとはいえない学生は、全体の72.4%に達する。72.4%を超えるのは、児教、栄養、管士、服美の4学科で、栄養と管士では、80%を超える。また「4: そう思わない」は、全体では22.6%で、最も高い栄養では28.9%となっている。

(4) 教職eポートフォリオに取り組む際に、教員からのコメントやアドバイスを参考にしている

全体では、54.4%の学生が教員からのコメントやアドバイスを参考にしていると肯定的にとらえていることがわかる。54.4%を超えるのは管士、環境、英コ、心カ、教福の5学科で、環境、心カ、教福では60%を超える。また、「1: そう思う」は、全体の14.8%であり、環境と心カで

は20%を超える。一方、肯定的にとらえているとはいえない学生は、全体の45.6%である。45.6%を超えるのは、児教、栄養、服美、造形の4学科で、児教、栄養、服美では、50%を超えている。さらに、「4：そう思わない」は、全体では15.5%で、最も高い栄養では23.7%となっている。

(5) 教員のコメントを入力した先生に、質問やアドバイスを受けやすくなった

全体では、18.7%の学生が入力した教員に質問やアドバイスを受けやすくなったと肯定的にとらえている。18.7%を超えるのは、環境、造形、英コ、心カ、教福の5学科であるが、回答者(履修者)数の少ない教福を除くと、最も高い環境で34.5%である。また「1：そう思う」は、全体の2.9%であり、栄養、管士、服美、教福は0%となっている。一方、肯定的にとらえているとはいえない学生は、全体の81.3%に達する。81.3%を超えるのは、児教、栄養、管士、服美の4学科で、栄養と管士は90%を超えている。さらに、「4：そう思わない」の回答者は、全体では37.9%で、最も高い栄養では57.9%となっている。

(6) 教職eポートフォリオの入力は、決められた期限内にできている

全体では、72.1%の学生が入力を決められた期限内に行い、教職eポートフォリオの作成に関して前向きに取り組んでいることがうかがえる。72.1%を超えるのは、栄養、管士、環境、造形、英コ、心カ、教福の7学科で、環境、英コ、心カ、教福は80%を超えている。また、「1：そう思う」は、全体の43%であり、栄養、管士、環境、心カでは50%を超えている。一方、前向きとは言えない学生は全体の27.9%である。27.9%を超えるのは児教と服美の2学科のみで、児教は半数を超えている。さらに、「4：そう思わない」は、心カと教福では0%であるが、全体では12.4%で、最も高い児教は31.5%となっている。

以上のように、取り組む姿勢において、前向きに取り組む、または肯定的にとらえている学生が50%を超えるのは「①教職eポートフォリオの目的を理解し、取り組むことができている」、「④教職eポートフォリオに取り組む際に、教員からのコメントやアドバイスを参考にしている」、「⑥教職eポートフォリオの入力は、決められた期限内にできている」の3項目で、いずれも教職eポートフォリオの入力に関連する内容である。一方、前向きとはいえない、または肯定的にとらえているとはいえない学生が50%を超えるのは「②教職eポートフォリオを作成することによって、教職課程履修の目的が明確になった」、「③教職eポートフォリオに入力した目標や学習内容を学期中に確認し、学修に役立てている」、「⑤教員のコメントを入力した先生に、質問やアドバイスを受けやすくなった」の3項目で、いずれも教職eポートフォリオの活用に関連する内容である。

これらの結果から、本学の教職課程履修者の教職eポートフォリオへ取り組む姿勢は、その目的を理解して教員からのコメントやアドバイスを参考にしながら期限内に入力を終えるという実務的な面では、半数以上の学生が前向きまたは肯定的に取り組むが、入力のプロセスや内容を通して教員の

アドバイスを受けながら教職課程履修の目的の明確化や自身の学修に役立てるといふ本質的な面では、半数以上の学生が前向きまたは肯定的にとらえているとはいえない実態であることが明らかになった。

ただし、「③教職eポートフォリオに入力した目標や学習内容を学期中に確認し、学修に役立てている」について肯定的にとらえている学生は全体の27.7%にすぎないが、「②教職eポートフォリオを作成することによって、教職課程履修の目的が明確になった」については41.7%で、教員養成を主目的としない学科からの履修者が多くを占めるなかで、教職課程を履修する者としての意識をもって教職eポートフォリオに取り組んでいることがうかがえる。また、「⑤教員のコメントを入力した先生に、質問やアドバイスを受けやすくなった」についても肯定的にとらえている学生は、全体の18.7%にすぎないが、現状では、コメントやアドバイスを入力者が必ずしも学生と面識のある教員とは限らないことを踏まえる必要がある。

では、以上のような姿勢で取り組んだ結果として、学生は、教職eポートフォリオの有効性と達成状況をどのように認識しているのだろうか。

4.5 教職eポートフォリオの有効性と達成状況

(1) 教職eポートフォリオ作成による効果

教職eポートフォリオの作成を通して、学生は資質能力の形成にかかるどのような側面に有効性や達成感を認識しているのだろうか。調査では、7つの質問項目を設定し、4段階（「1: そう思う」～「4: そう思わない」）で回答を求めた。その結果を図4.5.1に示した。ここでは、「1: そう思う」と「2: どちらかというと思う」を合わせて「有効性・達成感あり」、 「3: どちらかというと思わない」と「4: そう思わない」を合わせて「有効性・達成感なし」と分類し、分析する。

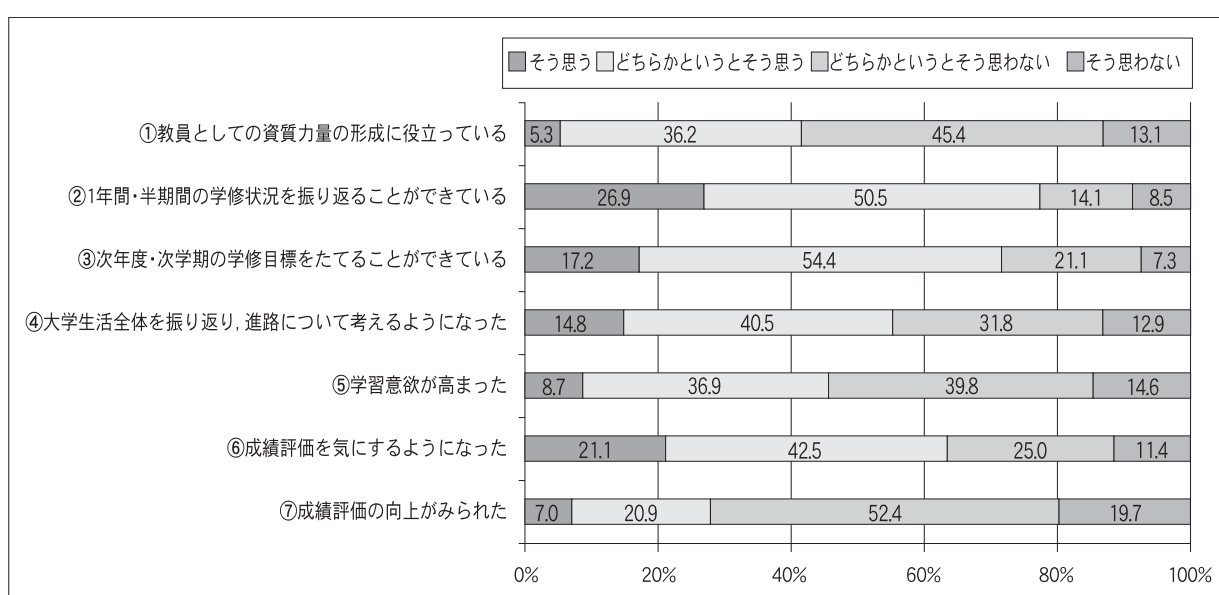


図4.5.1 教職eポートフォリオ作成による効果 (n=412)

「有効性・達成感あり」と50%以上の学生が認識しているのは、「②1年間あるいは半期間の学修状況を振り返ることができている」の77.4%を筆頭に、「③学修の振り返りにもとづいて、次年度あるいは次学期の学修の目標をたてることができている」71.6%、「⑥成績評価を気にするようになった」63.6%、「④大学生活全体を振り返り、将来の進路について考えるようになった」55.3%の4項目である。50%に満たなかったのは、「⑤学習意欲が高まった」45.6%、「①自分の(教員としての)資質力量の形成に役立っている」41.5%、「⑦成績評価の向上がみられた」27.9%の3項目であった。

このような結果から、2年間のeポートフォリオの作成を通して、学生は学修状況の振り返りと次年度・次学期の学修目標の設定を有機的に関連づけて活用していることがわかる。しかし、学修の振り返りと学修目標の設定が、必ずしも学習意欲の向上や資質力量の形成にまで結びついているわけではない。本次調査の対象者は、eポートフォリオ作成後の取り組み期間も短く、具体的な学修の成果を導きだすまでに至っていないのも事実である。そこで、eポートフォリオ作成の目的を徹底するとともに、各科目の学習と教職課程全体の位置づけを明確化する働きかけが必要なことを示唆している。

教職eポートフォリオの効果として、学生は学修の振り返りを学修目標の設定と有機的に結びつけて活用している実態が明らかになった。ではその結果として、教員に必要な資質能力についてどの程度獲得できていると評価しているのだろうか。

(2) 教員の資質能力の獲得程度

教職eポートフォリオに掲げられている「教員に求められる資質能力」の7つの能力指標について、調査実施時における能力の獲得状況を尋ね、4段階（「1：かなり身につけている」～「4：まったく身につけていない」）での回答を求めた。その結果を図4.5.2に示した。以下、「1：かなり身につけている」と「2：ある程度身につけている」を合わせて「獲得あり」、「3：あまり身につけていない」と「4：まったく身につけていない」を合わせて「獲得なし」と分類し、分析する。

教職eポートフォリオを作成し、2年間の学修経験を踏まえて「獲得あり」と50%以上の学生が評価した能力は、「③他者と協力する力」(84.2%)、「④コミュニケーション力」(76.0%)、「②子どもについての理解力」(68.7%)、「①学校教育についての理解力」(61.9%)、「⑤教科・教育課程に関する基礎知識・技能」(58.7%)の5項目である。反対に、「獲得なし」と評価した能力は、「⑦課題探求力」(35.2%)、「⑥教育実践力」(23.0%)の2項目である。

学生はこの2年間、共通科目をはじめ教職に関する科目、教科に関する専門科目などさまざまな科目を履修し、能力の獲得状況の基準にも個人差があるが、履修科目の傾向に見合った能力獲得の状況を示しているように思われる。今後は、学生個々人の4年間の能力獲得の推移を追跡し、学修成果との関連性を把握するとともに、その関連性を高める工夫が必要であると考えられる。

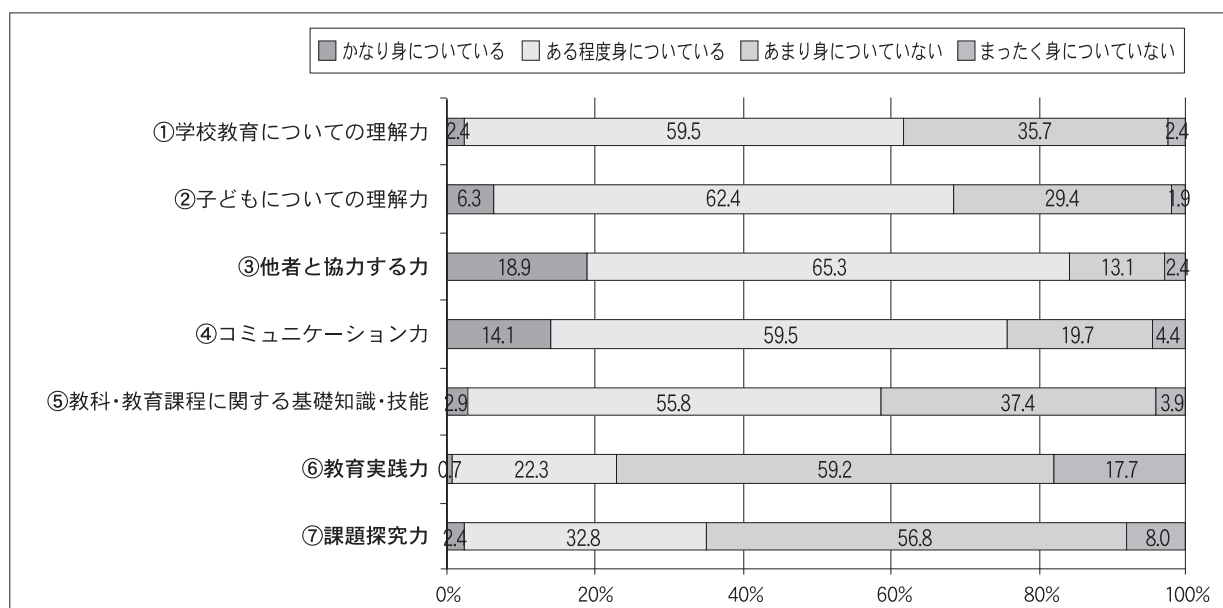


図4.5.2 教員に求められる資質能力 —— 7つの指標 (n=412)

質問項目以外に、学生は、eポートフォリオの作成をとおして、自身に起こった具体的な変化をどのように感じているのであろうか。次に、自由記述の内容を見ていくことにする。

(3) 教職eポートフォリオの作成により自身をもっとも変化したこと

教職eポートフォリオの作成により、学生自身が「もっとも変わったこと」について自由に記述してもらった。回答者の65.5% (270名) より回答 (記述) が得られた。その割合の高さから、学生の教職eポートフォリオの取り組みに対する思いが伝わってくる。

その内容は、上述した「(1) 教職eポートフォリオ作成による効果」の項目に対応する記述が多かったが、その記述内容には学生個々人の意志や心情が吐露されており、自由記述の長所が十分に発揮されている。そこで、「教職eポートフォリオ作成による効果」との対応関係を踏まえながら、詳細な内容を分類し、まとめたのが表4.5.1である。

表4.5.1 教職eポートフォリオの作成により自身をもっとも変わったこと

問14の内容／問12との対応	自由記述内容例
①教員としての資質力量の形成	<ul style="list-style-type: none"> ・教職について必要な能力などが明確に分かって、それについて努力するようになった ・教職eポートフォリオで、教師になることをしっかり受け止め、真剣に考えるようになった ・自分の学修状況やいろいろな資質能力について客観的に見直すことで、足りない能力にどのようにアプローチすべきかを考え現在取り組んでいる ・1年次よりは教員という職業への興味、理解、自覚が大きくなった
②1年間・半期間の学修状況の振り返り ③次年度・次学期の学修目標の設定 ④大学生活全体の振り返りと将来の進路	<ul style="list-style-type: none"> ・成績評価の振り返りとその原因・背景の振り返り、評価の観点の把握と学習・生活への活かし方、課題把握と資格取得への意欲と自覚の向上、大学生活全体の見直しなど学業にウエイトをおいた見直しに関する記述 ・生活態度や成績を文章化することで、自分を客観的に見直すことができた、教職課程を履修することに対して意義、意欲、緊張感が増した、どのような視点に立って自己理解すべきなのかアプローチの方法が増えた、学年比較ができ今の自分の成長が実感できる。自主的に作業を進める、期限管理など習慣化の糸口になったなど、学習状況だけでなく自分自身の振り返りと見つめ直しの契機としている記述
⑤学習意欲の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にとって必要とされる補充内容を確認し克服に向けての意欲、明確な目標設定による意欲と行動力の強化および科目間の関連性の理解、やり遂げた結果としての評価より達成感の重視、ボランティア活動や学外活動への参加意欲の向上、「教員コメント」の入力による学習意欲の喚起に関する記述
⑥成績評価を気にする ⑦成績評価の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の苦手な分野が分かって、目標を立てやすくなり、成績向上に役立っている ・成績について気にするようになり、少し成績の向上が見られた。次の年度に向けての明確な目標が持てるようになった ・学期ごとに自己目標をもって勉学に臨むことができるので、成績の向上がみられた。また反省もできるので、次の学びに活かすことができる。しかし、必要以上に成績を気にしすぎてしまい、ストレスが大きくなった気がする

自由記述の内容は、2つに大別できる。

一つは、文字通り「②教職eポートフォリオを作成することによって、1年間あるいは半期間の学修状況を振り返ることができる」の表記どおり「学修の振り返り」に関する記述内容である。

二つは、学修を振り返ることによって、自分自身を振り返り、見つめなおす契機としていることに関する記述内容である。教職eポートフォリオの取り組み体験を通して、学修状況だけでなく、自ら主体的に物事に取り組む姿勢や客観的・多面的な自己理解の視点の獲得、教職資格への意欲と自覚の喚起、計画的な取り組みと成長の実感など、eポートフォリオの作成を契機に修得した波及効果とも呼ぶべき効果である。

これら自由記述の内容から、教職eポートフォリオの有効性や達成状況の割合は、学年や履修科目等も勘案しながら把握することが必要であり、有効性や達成状況の「問」として示された項目以外の有効性も確認されたことを明記したい。彼女たちの3・4年次の変化を追跡することで、教職eポートフォリオの効果をより明らかにしていきたいと考える。

最後の質問として、教職eポートフォリオに関する全般的な意見を自由記述で求めた。

4.6 教職eポートフォリオに関する全般的な意見

最後に、教職eポートフォリオに関する全般的な意見を自由記述により求めた。その結果、回答者の62.9%（259名）から回答が寄せられた。全般的な意見をまとめると、入力作業にあたって、パソコンの台数や部屋が限られているため、なかなか思うように作業をすることができないという意見が多かった。そのため学生はパソコンの台数を増やすことや部屋を増設すること、いつでも入力できるように利用時間を延長するなど、入力する環境を整えることを強く希望している。また、入力画面や質問項目などもわかりにくいという意見もあり、システムの改良も検討課題である。学生が教員のコメントを少なからず期待している様子がうかがえる。教員のコメントにより、学生の教職への意識の高まりに繋がることもあるので、コメントを入力する教員に対しても、学生が先生のコメントを期待していることを十分に説明する必要がある。教職に対する意識を高める上でも、4年間を振り返る上でも、教職eポートフォリオの作成は重要な作業であると考えられるため、1年次のガイダンスにおいてその意義や入力方法（記入例を作り）をもっと詳しく説明することが必要である。

5. 今後の課題

本学では、新設科目「教職実践演習」の設置にあわせて教職eポートフォリオ・システムを導入した。このシステムが意味のあるものとなるためには、さらなる改善が必要である。調査結果からもわかるように、教職課程を履修するすべての学生が、ポートフォリオ作成の意味・意図を十分に理解しているわけではない。今後、よりわかりやすいガイドブックの作成やガイダンスの充実を図っていかねばならない。なお、2012（平成24）年度より、1年生が新規にポートフォリオの作成をはじめめる時期に合わせて、試験的にピア・メンターの導入を開始した。これは、すでにポートフォリオの作成を進めている上級生が、新規にポートフォリオの作成をはじめめる1年生に対して助言をおこなうものである。同じ学生である「ピア」が相談に乗ることにより、ポートフォリオの開始時点での問題克服が期待されている。同時に、ピア・メンターを経験することにより、学生自身も教育活動に参加することになり、教員としての資質能力の向上が図られるという相乗効果も期待できる。また、ユーザインタフェースの問題として、よりアクセスしやすく、入・出力しやすいシステムに改善していくことも必要であり、現在は、定型的なデータを集積しているが、今後は、教育実習や介護等体験の記録や教科にかかわる教材や作品といった不定型なデータを収められるようにすることも検討課題である。さらに、本学ですでに利用されているeラーニングシステムであるe-Kaseiとポートフォリオ・システムとの連携も視野に入れる必要がある。

本学では、約半数の学生が何らかの教員免許状を取得して卒業していく。このことを考えると、今後、すべての学生を対象とした「全学ポートフォリオ」の導入を検討していく必要があると考える。本学のディプロマ・ポリシーの達成状況を把握するものとして、また今日、学生の学修時間の短さが問題視されるなか、学生の諸活動を明示化する手段として、ポートフォリオは有効なものとなるであろう。ポートフォリオのもつ可能性や効果を検証しながら、大学としての教育の質保証を

高めていく努力が求められる（私立大学情報教育協会 2009, 2010, 2011）。

なお、今回の調査とは別に、コメントとアドバイスを入力した経験のある教員を対象とした調査（「教員調査」）を実施している。この結果については、別途、報告する予定である。また、今回の調査対象となった学生の卒業時に、第二次調査を実施する予定である。これらを通して、教職eポートフォリオの教育効果、さらには教員養成教育におけるICT活用の方向性がより明確になっていくと考える。

参考文献

- 課程認定委員会 2008, 「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」（文部科学省HP http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afldfile/2011/07/22/1267752_05.pdf）.
- 鞍馬裕美 2010, 「教職課程における履修カルテとポートフォリオの導入に関する一考察」『帝京大学教職大学院年報』創刊号, 19 - 28頁.
- 黒澤宣輝 2012, 「「教職実践演習」の授業展開に関する研究 - 効果的な学力の総仕上げ法と卒業後の自己啓発力を培う」『名古屋学芸大学短期大学部研究紀要』第9号, 1 - 20頁.
- 私立大学情報教育協会 2009, 『大学教育と情報』Vol.18, No.1.
————— 2010, 『大学教育と情報』Vol.19, No.1.
————— 2011, 『大学教育と情報』Vol.3.

付記

eポートフォリオのシステム構築およびICTの教育活用にあたっては、琉球大学総合情報処理センターの谷口祐治先生より多くのご助言を頂戴した。ここに記して感謝申し上げる次第である。また本稿は、東京家政大学「地域共同研究支援経費」（平成22～24年度）による「ICTを活用した教員養成教育に関する研究（研究代表者：青木幸子）」の成果の一部である。

